京都大学若手人材海外派遣事業　ジョン万プログラム（職員派遣）
平成２９年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研　修　者	職　　名	企画・情報部企画課　掛員
	氏　　名	八木　遥
研修先等	渡航先国名	ドイツ連邦共和国
	研修先機関名	京都大学欧州拠点ハイデルベルクオフィス
	研修期間	平成 29 年 4 月 6 日～平成 29 年 9 月 24 日

具体的な研修内容

海外拠点のミッションである研究活動支援、教育活動支援、教職員・学生の国際化および広報・社会連携・ネットワーク形成を軸とした活動を通して、多様な業務に携わる機会を得た。企画から実施、報告に至るまでの一連の流れを経験するなかで、欧州の関係機関と連携し、また教職員や学生と直接交流することにより、本学の国際化に向けた動きや活動について理解を深めた。印象深かった研修内容を上述のミッションごとに紹介したい。

《1. 研究活動支援》ハンブルク大学共同シンポジウム等への参加

ハンブルク大学と大学間学術交流協定が締結され、調印のセレモニーに出席した。また、締結に伴い開催された共同シンポジウムに参加し、研修者は主に当日の誘導案内および記録を担当した。シンポジウムは２日間にわたって開催され、６つの研究分野に分かれて研究発表や共同研究に向けた話し合い、実験設備の見学等が行われた。初めてシンポジウムへ参加し、研究者交流の現場を垣間見ることができただけでなく、同イベントから共同研究へと発展していく可能性を実感した。

大学間協定が結ばれる瞬間に立ち会い、また、共同研究のきっかけとなりうるシンポジウムに参加できたことは大学職員としてとても印象深い経験となった。

© UHH/Dingler

《2-1．教育活動支援》留学説明会の実施

本学に留学予定の学生および日本留学に興味を持つ学生を対象とした留学説明会がフライブルク大学およびハイデルベルク大学において催され、研修者は大学紹介や日本における生活基本情報のレクチャーを担当した。大学として何を伝えるべきか、限られた時間の中で何を優先させるのか、適当な情報量はどのくらいなのかなどを検討したうえで、自身の言葉、自身の見せ方でプレゼンテーションを作成した。派遣前に受講した英語実践研修での学習内容を活かして、発表時は大きな声でゆっくりと目配りしながら話すことを心掛けた。参加した学生はみなパワーポイントのスライドを見ながら熱心に耳を傾けていた。日本の学生と大きく異なる点はメモをとったり資料を見ながら聞く学生がほとんどいなかったところである。そのため、プレゼンテーションをするうえでは発表者も前を見て対話するようにゆっくり話すこと、パワーポイント上の文章を相手が読める程度の長さにして聞き手が情報を漏らすことがないようにすることが重要であると感じた。また、ハイデルベルク大学における説明会は、拠点が主催するもので、プログラム構成等の企画や本学留学生によるプレゼンテーションのサポート、開催報告に係る広報記事の作成などを併せて担当した。

《2-2．教育活動支援》教育フェア“EAIE2017”への参加

欧州の国際教育交流団体 EAIE（European Association for International Education）の年次大会に参加した。国際教育支援室、国際教育交流課ならびに国際交流課と連携して本学の学生交流の深化が望まれる欧州の大学と意見交換および情報収集を行った。3 日間にわたり合計 18 大学と面談を実施し、研修者は書記を担当した。イギリス英語や英語を母語としない担当者のアクセントによりヒアリングに苦戦した。例えば学部学科が話題に挙がったときに“フィオロジ―”と聞き取ったものが実際には“Theology（神学）”であったり、“ファイン・アーツ（美術？）”が“Finance（財政学）”であったりと馴染みのない発音や想定していない単語を即座に日本語に変換するのは難しかった。そのような場合は、ひとまず聞こえたまま英語もしくはカタカナでメモを残して面談後に全員で情報共有する際に整理した。今回の経験を今後のヒアリングに役立てるとともに、ヒアリング力をさらに高めるために、より多くの英語を聞いて音に慣れる努力をしたい

	《3．教職員・学生の国際化》大学職員の国際化に関する調査の実施 大学職員の国際化に関する調査を企画し、ハイデルベルク大学、筑波大学ボン事務所及び千葉大学ドイツセンターベルリンオフィスの職員を対象に大学の国際化に関するヒアリング等を実施した。拠点において職員をターゲットとした調査を実施するのは今回が初めてであり、本学でも検討の余地があると思われる他大学の取組みについて関係部署へフィードバックを行った。 《4．広報・社会連携・ネットワーク形成》ウェブサイトなどを活用した広報活動の実施 欧州拠点ウェブサイトおよび Facebook への記事の掲載・投稿やメールマガジンの配信により拠点活動の情報発信を行った。ウェブサイトの編集に加え、一部記事の執筆を担当した。執筆については、広報媒体の特性に合わせて文体を工夫することや、読み手に伝えるべき内容を正しく理解して文章を作成することに苦労したが、対外的な文章作成の勉強になった。起承転結があり、一読しようと思ってもらえる文章を書けるよう他の部署や他大学の広報記事を筆者の視点から読むようになり、意識の変化も感じている。
本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック	幅広い業務を経験できたことに加え、業務や交流を通してグローバルに活躍する職員の働き方（働く姿勢）や能力について学び、国際的な職員を目指すうえでの課題やそれを克服するためのヒントを得たことが成果と考える。 国際的な職員とは単に語学力が高い職員ではなく、日本で活躍しうる素養を持つ人材が英語というツールと異文化理解力をもって自身の能力を応用的に活かせる人材であると感じた。思考力や表現力、行動力、情報収集力を総合的に養うとともに英語力および異文化理解力をより一層深めることで、国内外問わず活躍できる職員を目指したい。